さかまた

鴨川シーワールド NO. 43

シーワールドのアニマル達

●ゴンズイ

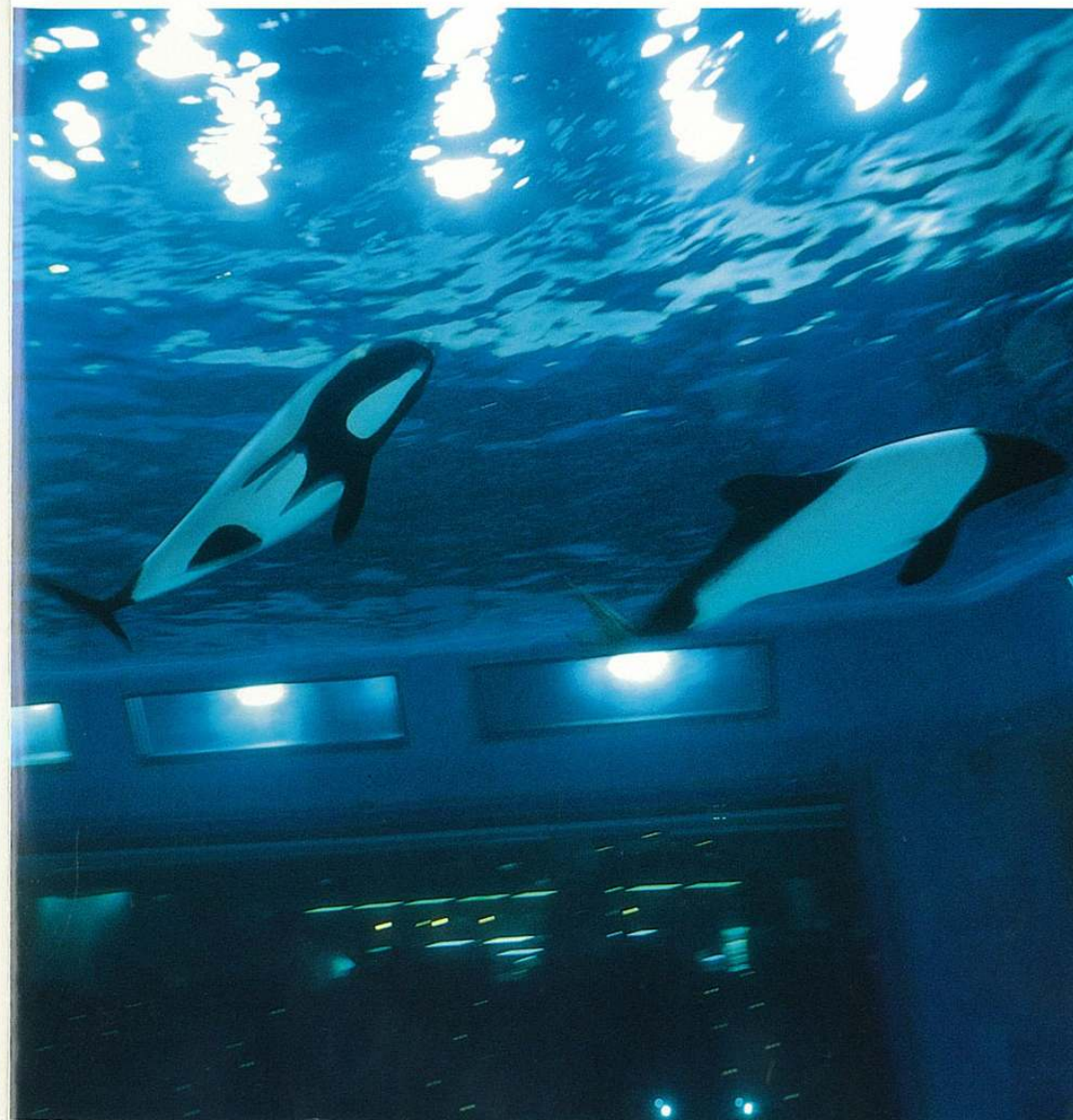
ゴンズイは本州中部以南の暖かい海に生息しているナマズの仲間で、釣りの外道としてもよく知られています。口のまわりには４対のヒゲがあり、背中がチョコレート色、お腹が灰白色で、体の側面に黄色い２本の縦じまもようがあることから英名はバーバーイール（床屋もようのウナギ？）と呼ばれています。この鮮やかな体色は幼魚期だけのもので、成長するにしたがい、全体にくすんだ褐色となります。背ビレと胸ビレには毒をもった棘があり、刺されるとひどく痛み、傷口が壊死する場合もあるほどです。鴨川付近では、６月～８月にかけて港の岸壁や磯で体長１～２cmのゴンズイがダンゴ状に群れているのを見ることができますが、これは体から分泌される「集合フェロモン」という物質が作用してできるものでこうしたゴンズイの群れは〝ゴンズイ玉〟と呼ばれます。当館ではこれらを採集し展示していますが、採集した時はまだ小さいため、その口にあわせたエサを与えるのに苦労します。しかし、次第に環境に慣れるにしたがい手からエサを食べてくれるなど、かわいらしいしぐさも見せてくれます。「何？あの黒い魚」とゴンズイ玉の動きに興味を持ち、足を止めるお客様も多く、パノリウムで飼育されている魚たちの中でもゴンズイたちはちょっとした人気者です。（入野）

▲ゴンズイ *Plotosus lineatus*

●ゲンゴロウ

ゲンゴロウは本州以南の水生植物の茂る池や沼や流れのゆるやかな小川などで生活する体長 3.5 cmほど(成虫)の水生昆虫です。体は流線形で、後足は舟のオールの形をしていて、水中を効率良く泳ぎまわることができます。水面で逆立ちをしているところを時折見かけますが、これは水面上に出たおしりから、羽と胴の間に空気をたくわえて、水中での呼吸に使うための行動です。１回の空気補給で約10分間も潜水ができ、さながら空気ボンベを背負った小さなダイバーと言えましょう。また外敵から身を守るために、鳥やカエルなどに襲われると苦い味の白い体液を出し、逃れるのに役立っています。この体液を実際になめてみると、南京豆の殻をかみつぶしたような苦い味がします。このようにゲンゴロウのような小さな生きものは厳しい自然の中で生きていくために色々な術を持っているのです。

当館では、水族館エントランスにある「おもいでの水辺」でゲンゴロウを見ることができますが、自然の水辺ではめっきり姿が減ってしまいました。一昔前までは養魚場の害虫、そして子供達の人気者でもあったゲンゴロウですが、私達がもっと自然のおもしろさ、大切さを知れば、ゲンゴロウは再び身近な生きものとして出合うことができるようになることでしょう。（八ッ木）

▲ゲンゴロウ *Cybister japonicus*

さかまた No.43 （禁無断転載）
編集・発行 鴨川シーワールド
〒296 千葉県鴨川市東町 1464－18
☎(04709)２－２１２１
発行日 平成６年７月

日本の水族館での
バンドウイルカ

長寿 NO.1 『スリム』

▲近影　ステージ上にランディングしたスリム

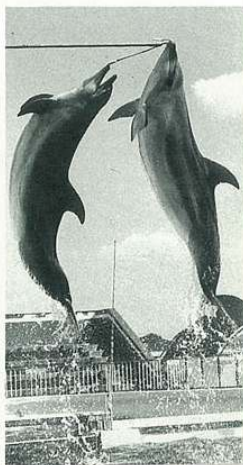
大歓声の上がるイルカショープールでは輪くぐりやハイジャンプなどのイルカ達の見事な演技が目に飛び込んできます。一方、ショーを行っていない隣のプールでは、仔イルカに寄り添いながら泳ぐイルカ達を見ることができます。その中の1頭がバンドウイルカの「スリム」です。鴨川シーワールドがオープンした翌年に搬入されたスリムは平成6年現在、日本の水族館で飼育されているバンドウイルカの中で最も長生きをしているイルカです。ここでは、この「スリム」を当館で飼育した23年間でのエピソードをまじえ、ご紹介します。

スリムでない『スリム』

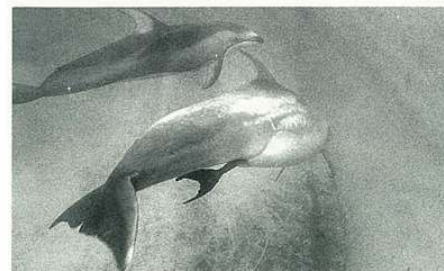
スリムは、昭和46年11月、静岡県伊東市川奈より搬入されたバンドウイルカ4頭のうちの1頭で、ガッチリとした体形をしたイルカでした。搬入後の飼育経過は順調でしたが、翌年の昭和47年7月に体調をくずし、7月の末には食欲が無くなり餌を食べなくなってしまいました。目の前に投げた餌のサバに見向きもしません。網で取り上げて、抗生物質の注射や温水の経口注入などの処置を行う毎日が続きましたがいっこうに回復のきざしが見えません。そこで人とのコミュニケーションを強化することと、食欲と排便を詳細にチェックするために、別のプールへ移動し一頭だけで飼育することにしました。祈るような気持ちで移動してみましたが、スリムの状態は一進一退で食欲はでてきません。数日後、移動した効果がなかったので、イルカ同志のコミュニケーションによる効果を期待し、再び仲間のいるイルカプールにもどしました。そして移動後、餌を与えてみようとバケツを持って行ったところ、力なくではありますが、なんとスリムが寄ってきて投げ与えた餌を食べてくれたのです。その日を境に食欲は徐々に回復に向かい、8月末には食欲も一般行動も復調しました。しかし、その時の体重は、なんと199kgと搬入時より50kgも減ってしまい、名前の通りスリムな体形となっていました。それ以後のスリムは病気をすることもなく元気に過ごし、丸々とした体つきに成長し、今では体長290cm、体重300kgになっています。

ショーでの活躍

スリムは、ショーのスターとして活躍するため調教が行われ、その結果、数々の演技を習得し、昭和47年からはイルカショーのスターとして大活躍をしていました。大きな体でのジャンプは水しぶきが飛び散り豪快そのものでした。当時、テレビ番組でイルカのジャンプ大会が行われたことがあり、当館からはスリムが出場し、イルカプールを2

スリム・フリップのWターゲットジャンプ ▶

周する助走から生まれる高さ6mのハイジャンプで見事優勝しました。また、一緒に搬入された同じバンドウイルカのフリップとの息はぴったりでダブルターゲットジャンプは見る人々を魅了し、体をひねりながら飛び上がるスピンジャンプや高さ2mを越すハードルジャンプなどの妙技でお客様にイルカの素晴しさを余すところなく伝えてくれました。しかし一方では、私たちが間違った合図などをするとスリム独特の目をして間違いを指摘するかのように突然ショーをボイコットしてしまうこともあり、新人のトレーナーをとまどわせることも、しばしばありました。

突然の出産

こうして、ショーを通じてお客様に感動を与えながら毎日を過していたスリムですが、昭和56年

のゴールデンウィークのある日、突然ショーをやらなくなってしまったのです。「おかしいな」と思ってお腹を上にさせてみたところ、なんと生殖孔がいつもより開いているではありませんか。これは出産が近いと、大あわてでショープールから隣のプールに移して観察を続けることにしました。その結果、午後4時頃には仔イルカの尾ビレが出始め、それから1時間後には無事出産が終了したのです。昼間の出産とあって多くのお客様が息をのんで見守っていましたが、仔イルカが元気良く水面にとび出した時には、盛大な拍手がまきおこりました。この仔イルカは、残念ながら5ヵ月で死亡してしまいましたが、オキゴンドウとの交雑種であったため、貴重な資料を残してくれました。

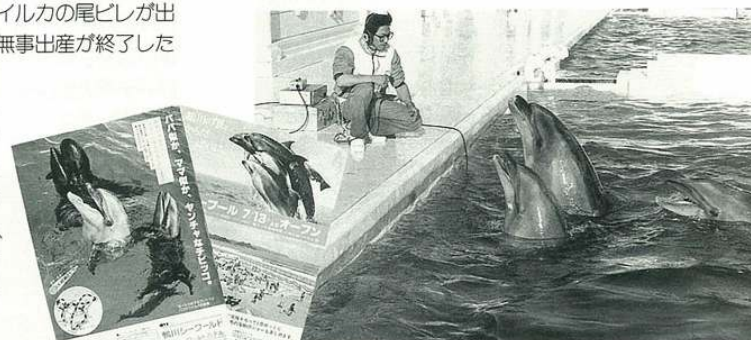
繁殖への貢献

今までに6回の出産を無事やりとげたスリムはまさに頼りがいのある「おふくろ」といった感じです。スリムは昭和60年に搬入された雄のバンドウイルカのウルフとの間に3頭の仔を出産し、日本の水族館でのイルカの繁殖のためにも大活躍をしています。活発で気の強い性格のスリムですが母親の役目の他に仲間のイルカの出産時には乳母役として仔に付添い、ぎこちなく泳ぐ仔イルカを助けることもあり、とてもめんどうみの良いイルカなのです。

平成2年6月に出産したカリムは約2年半後にやっと親離れをしましたが、スリムはホッと一息つく間もなく、現在は平成5年7月に出産した仔イルカの育児に大忙しの毎日を過しています。

頑張れ！スリム

たくましく、気が強く、その反面優しさも持ちあわせたイルカ「スリム」。私たちは「スリム」から色々なことを学びました。ショーのスターとして出産、育児にと活躍した23年間、これからもさらに元気で長生きをしてもらうよう大切に飼育していきたいと思います。アメリカの水族館では、推定42才のバンドウイルカが飼育されています。(1990年現在)。スリムの年令は推定27才ですからまだまだ頑張ってもらいたいものです。

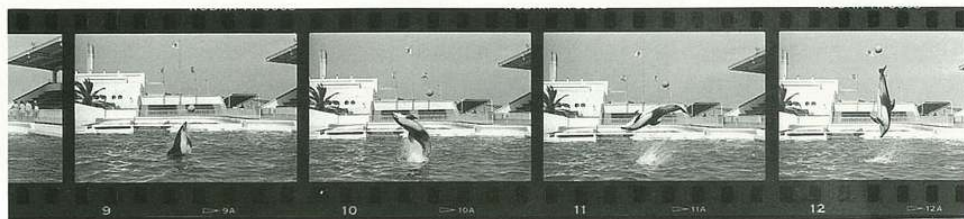
シーワールドにお越しの際は是非イルカショープールの隣のプールで仔イルカと遊んでいるイルカに「スリム頑張れ！」と声援をおくってあげて下さい。(佐伯)

▲昭和56年頃のチラシにも登場

▲水中の鳴き声を調査中(スージー、ウルフ、スリム)昭和62年頃

トピックス

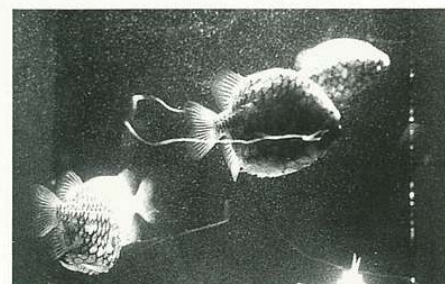
イルカのオーバーヘッドキック

今春、イルカショーに新しい種目「オーバーヘッドキック」が加わりました。この種目は、イルカが水面に浮いているボールをくちばしで空中に突き上げ、そのまま宙返りをして尾ビレでキックするものです。これまでの種目のほとんどが、回転する、尾ビレを振る、ジャンプをするなどのように、イルカには１つの動作しか要求していませんが、オーバーヘッドキックではボールを空中に上げることとキックすることの２つの動作を組み合わせて行わせなければなりません。調教を開始した時は、この複雑な種目をうまくイルカに教えることができず、プールサイドで考え込んだり、あきらめそうになることもありましたが、ボールの上げ方、キックのしかた、どんなボールを使ったらうまくいくかなど、いろいろと考えた末、次第にキックの成功率も高くなりました。そして、このオーバーヘッドキックが初公開となった今年の３月25日、不安と期待で緊張した私たちトレーナーが見つめる中、イルカはプールに投げ入れたボールをくちばしで突き上げ、次の瞬間大きな孤を描いて見事にキックしてくれたのです。スタンドからは今までの苦労を消してしまう程の歓声と大きな拍手が聞えてきました。イルカショーをご覧になる際には、一瞬のうちに行われる「オーバーヘッドキック」の絶妙なイルカのヘディングとキレのあるキック、そしてみごと決まった時のトレーナーの喜ぶ様子もあわせてご覧下さい。

（斉所）

▲わずか0.6秒のはなれ技！

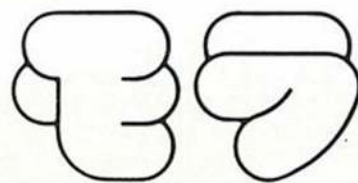
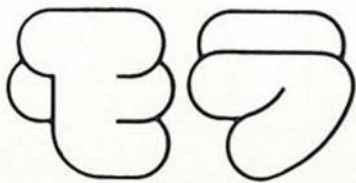
置水槽コーナーが生まれかわりました！

▲あざやかなイラストの描かれた壁面

「潜水艇ドルフィン2000」として親しまれてきた置水槽コーナーが、生まれかわりました。水の生物の生活をわかりやすく、また楽しく学べることを目的に、いろいろな工夫が盛り込まれています。展示スペースでひときわ目を引くのは、水中から仰ぎ見る水面をイメージした淡くブルーに光る天井です。南房総で見られる水の生物のイラストが描かれた壁面には、チョウチョウウオ類やベラの寝姿を紹介する「魚の眠り」、タツノオトシゴやカレイ類の忍者顔負けの「カモフラージュ」、クマノミとサンゴイソギンチャクの共生「もちつもたれつ」美しいポリプをいっぱいにひろげ生活をするヤギやウミトサカ類の「海のお花畑」、そして闇にあやしく光る発光魚マツカサウオの「光る魚」の５水槽が配置されています。この５つの水槽をのぞき見る展示窓は大小あわせて９つあり、小さな窓からは鏡を利用し、ひとつの水槽をいろいろな角度から観察できるようにしてあったり、魚たちが見ている世界を体験できるように魚眼レンズなどの特殊なレンズを組み込んだりしました。各水槽には光や水流などをコントロールする操作ボタンがついていて、お客様が自由にボタンを押して水槽の中の変化を見ることができるようにもなっています。

▲マツカサウオの発光の光跡（白く糸をひいて見える。開放にて撮影）

▲ウミトサカ類の「海のお花畑」ガラス面は泡で被れている ➡ ▲人が水槽の前に立つと泡が消えお花畑が現れる

百聞は一見にしかず！ボタンを押してみて下さい。きっと新しい発見があることでしょう。

（岡田）

●高砂淳二写真展開催

3月25日より5月8日まで、ピノキオハウスに於て高砂淳二写真展「ＳＥＡ－熱帯の海の生きものたち」が開催されました。

高砂氏は当館のポスターやカレンダーの動物写真を撮影している若手の水中写真家で、昨年は写真集「Free」を発表し好評を得ています。今回の写真展では、その写真集の中からモルジブ、ロタ、沖縄など南洋の島々の自然とそこに生活する海の生物たちを主役とした〝心の開放感〟が感じられる代表作品38点が展示され、同時に写真の人気投票も実施されました。人気投票では、枯れ枝にとまるアジサシの子供や、水中でダイバーをのぞき込むバンドウイルカの写真に人気が集まっていました。自然の中で暮らす動物達の数々の写真に訪れたお客様も満足していただけたことと思います。（前田）

●海の動物菊花展－マッコウクジラの展示－

昨年11月1日から23日まで行われた「海の動物菊花展」は今回で第６回を迎えました。今回の目玉作品としては、お客様からのアンケート結果で「クジラ」という要望が多かったことから、クジラの仲間でもよく知られているマッコウクジラに挑戦することにしました。春先に約１ケ月間かけて骨組を製作し、また開花時をイメージして菊の種類を慎重に選定しました。昨年は天候不順で病気も何度か発生し、例年になく神経を使いましたが、その苦労あってか11月には総勢47体の菊人形が誕生しました。その中で、ひときわ目立ったのが体長10mのマッコウクジラで、機械仕掛けの潮吹きとともに、その出来栄えに人気を博したことはもちろん、テレビでも生中継されました。これからもいろいろな海の動物に挑戦していきたいと思っています。（佐藤和）

●キタゾウアザラシの愛称決定

平成５年７月15日に、アメリカの水族館から当館に仲間入りをした２頭のキタゾウアザラシの愛称募集が行われ、9438通もの応募がありました。その中からオスは「パオ」、メスは「ポッシュ」という名前が選ばれました。「パオ（Pao）」は、蒙古地方の布張りの家のことで、キタゾウアザラシの横たわった姿が、この家の形に似ていることから名付けられ、「ポッシュ（Posh）」は、英語で優雅なという意味があることから、女の子らしく育ってほしいという願いを込めてつけられました。

愛称の発表は11月20日に行われ、命名者の渡海みゆき様（24歳・兵庫県在住）と、相田久美子様（21歳・東京都在住）には、ぬいぐるみ等が贈られました。（青田）

▲パオとポッシュ（手前から）

●第６回研究集会開催

今年で６回目を数える国際海洋生物研究所の研究集会が、２月５日、６日の２日間にわたり鴨川シーワールドホテルに於いて開催されました。

今回は 120名の参加者が集まり、「共存の時代の中で」というテーマのもとに国内外13名の研究者により、生態、保護、繁殖、生理、歴史、環境など幅広い分野の発表がなされました。発表の中にはイルカの人工授精に関する報告もあり、大きな話題提供となりました。また、引き続き行われた講演会には、東京都恩賜上野動物園長の増井光子さんを招き、「動物園での類人猿の社会生活」という演題の講演が行われました。講演の終わりには、たくさんの質問が出るなど、研究者ばかりでなく市民の方々の間にもすっかり定着した研究集会となりました。（勝俣浩）